



2006年11月25日

No.86号



JAWAN

日本湿地ネットワーク・JAWAN通信

日本湿地ネットワーク (Japan Wetlands Action Network)

〒191-0052 東京都日野市東豊田3-18-1-105 柏木実 方 TEL&FAX 042-583-6365

郵便振替口座 00170-8-190060 日本湿地ネットワーク

団体会費 5000円 個人会費 3000円 JAWAN URL : <http://www.jawan.jp/>



夏羽に衣替えしたムナグロたち (泡瀬干潟)

「うまんちゅぬ宝 泡瀬干潟」からの報告 (山城正邦) 記事参照

【目次】	「うまんちゅぬ宝 泡瀬干潟」からの報告 (山城正邦)	2
	市民による海岸植物群落調査の意義 (開発法子)	5
	伊勢湾「木曾岬干拓地」環境復元の取り組み (木原寿代)	8
	山下弘文さんの七回忌に寄せて	
	諫早の十年、セマングムの十年 (辻 淳夫).....	10
	山下弘文さんの思い出 日本の干潟の先住民 山下弘文さま (鈴木マギー) ...	11
	COP10に向けた韓日交換プログラム (於: 釧路~知床) 報告	
	(柏木 実 / 伊藤よしの).....	13
	私の夢の舞台「湿地と鳥たちの友だち」(チョ・ミンギョン)	14
	「三番瀬再生事業」は従来型公共事業へ逆流も	
	「市川海岸塩浜地区護岸改修事業」に関連して (今関一夫).....	17
	ラムサール条約COP10に向けた協賛金にご協力ください	19
	INFOMATION / 編集後記	20

「うまんちゅぬ宝 泡瀬干潟」からの報告

山城正邦 沖縄野鳥の会事務局長

泡瀬タイム

ザザザザザーッ。白銀の砂地に一斉に潜りこんだのは、空色のカニたちである。泡瀬干潟にどかどか入り込み、気のすむままに歩き続けると、決まって辿り着くのはこの広大な砂洲である。ミナミコメツキガニの隠れたつかの間の大地は、無数の砂団子で彩られる。逃げ遅れたそいつをよくよく眺めると、なんとも奇妙な姿である。何も無い白い大地の向こうには、沖縄の青い海。そして、カニたちと同じ色をした青い空に白い雲が浮かんでいる。鳥たちよりも沖にでてしまったので、陸側に振り返ると、シギやチドリたちは、やはり忙しく歩き回っている。贅沢な時間を過ごしながら、風に誘われるまま水の中に入っていくと、目の前に海草のジュウタンが広がる。泡瀬干潟のお気に入りのこの場所では、何人の人々が至福の時を楽しんだのだろう。

海の中の草原は怪しい生き物たちが目を引く。オレンジ色の体に恐竜を思わせるトゲを並べたコブヒトデ。沖縄の瓦屋根そっくりのカワラガイ、海草の草原に突き刺さるハボウキガイ、頭に雄器官、背中に雌器官をもつ雌雄同体のジャ

ノメアメフラシは触ってしまうと、紫色の液体を溢す。そういえば小豆くらいのイカの赤ちゃんが小さなひれで泳ぎながら、一丁前に墨を吐くのを見たことがある。自然の中での生き物たちとの出会いはほんとうに楽しいものだ。

陽が落ちて、星空の下の干潟を歩くのもまた楽しい。朔（新月）の夜は特別にお勧めだ。干潟に降り、ごつごつした礫の中をガサガサと歩き続けると少しずつ砂が混じりだす。川の水が小さな漣筋となり、干潟に溶け込む辺りにウミナナの妙な群がりが続く。そこを抜けると広い砂地が現れ、ゆるやかな波型の砂紋が続く。その日の波が作った造形美は、来るたびにその表情を変えてみせる。いつのまにか心穏やかにさせられ、静かに進んでいくと、コトツ、コトトツと砂の中から小さな声がする。映画「もののけ姫」に登場した精霊「こだま」の声に似た穏やかな音色は、今夜の訪問を歓迎するかのようには鳴り続ける。こいつの正体を見極めながら泡瀬干潟の自然の奥深さを感じさせられる。

干潟の奥へ進みながら夜の生き物たちと出会う。肉食のヨフバイは触覚のようなもので砂の表面を探りながら這い回る。所々にできた水だまりでは透明なエビが跳ね、大小の積み上げら



満ち潮で小さな岩に集まるキョウジョシギとチュウシャクシギ



明け方の干潟に集まったシギ・チドリ



アーサ色に染まった泡瀬干潟の春



泡瀬干潟ではしゃぐワラパーター（子供たち）

れた砂の山の傍らに対照的にできる窪みにはアナジャコが顔を出したりする。水面にライトを照らすと小さな魚たちが驚いて飛び跳ねる。ハリセンボンやウミヘビが見られることもある。ライトを消して海草場へ入り込む。青く光る草原は、星空を歩いているかのように足の先を前へ前へと光り続ける。光ってすぐに消える夜光虫、青白い液体をだすウミボタル。両手にすくった水を撒き散らすと青い光は、星空へと続く。幻想的な光景にしばしば時を忘れる事もある。こんな素敵な大人の夜遊びができるのも泡瀬干潟ならではのよう。

うまんちゅ(御万人)ぬ宝泡瀬の海

泡瀬干潟にはクビレミドロやトカゲハゼ、ニライカナイゴウナ、オキナワヤワラガニなど数多くの希少な生き物が記録されている。また、新種を含めた13種の海草が息息する藻場があることでも知られるようになった。貝類の種類では貝殻の記録も含めると約500種に上るといふ。科学的にみても貴重な海域であることはまちがいない。しかし、泡瀬干潟の埋め立て問題を考えるとき、この海がもたらす人々への恩恵は、もっと重要なことかもしれない。

毎日貝を採るおじー、おばー。季節の折々には海職人（ウミンチュ）に交じって地域の住民も海に入る。早春から春先の干潟は緑色に染まりアーサ採りで賑わう。旧暦の3月3日の浜下り（ハマウリー）の日には県内各地から集まった人々が海で遊び身を清める。子どもたちの春休みの頃にはモズク採りも始まる。そして、夏に

はセーグウワー（エビ）捕り、10月からはシーガイ（イイダコ）捕りの人たちが自前の投げ縄を振り回す。

四季折々に採れた産物はそのまます卓に並ぶか、親戚や友人に配られる事が多いようだ。私が最も好きな食材はアラスジケマンなどの貝のスープである。潮の香りをそのままダシにしたキブヤー汁（貝のスープ）は幼少の頃に時々口にしていたあの味そのままだった。そして、干潟で遊んだ遠い記憶がよみがえる。

泡瀬の隣にある我が家の前にもかつては大きな干潟が広がっていた。家の前から海までは一直線、坂道を下って葦原に覆われたガタゴト道を潜れば潮の香りがした。悪がきどもは貝を掘り出したり、カニを捕まえたりしながら、思いのむくまま遊びまわった。時には生き物たちにとっては残酷なこともした。潮満ち時にはブナー（フグ）の手づかみが楽しみだった。捕まえたブナーは干潟に穴を掘って砂で周囲を固めたところに放り込みブナー島と呼んでいた。干潟が海になるとアーマン（ヤドカリ）をさばいて釣り針に付け海へ投げ込んだ。ブナー島の小さな池で泳いでいたフグたちは、潮満ちと共に海に帰るが、時々アーマンにくらいつくまぬけなヤツもいた。

多くの鳥たちに出会ったのもこの干潟だった。中学のにわとりクラブが沖縄野鳥の会の人からもらった古びた望遠鏡は悪がきどもの運命を変えてしまった。慣れ親しんだ干潟を望遠鏡で覗くと愛敬のある鳥たちは、生き生きとしたその姿をみせびらかした。悪がきどもは興奮し、そ



ウミンチュ(海職人)
には飛び立たない
ムナグロたち

して自然を感じた。干潟に通いだすと鳥たちの習性も分かってきた。図鑑と見比べて種類も識別できるようになってきた。潮が満ちてくると鳥たちはどんどん集まってくる。干潟がどんどん小さくなり忙しそうに餌をとりながらシギたちが迫ってくる。振り返るとそこにも鳥たちでいっぱいだった。陽がオレンジ色になるまで傾き空を染める頃、悪がきどもは鳥たちのいる出口へと歩き出す。乱舞する褐色のシギやチドリたちは一瞬にして真っ白にひるがえり、それぞれで声で鳴き交わしていた。鼻歌を歌いながら帰る頃にはオレンジ色の空は夜の準備を始めていた。

泡瀬に通うようになって鳥たちに囲まれたあの頃が重なり合う。あの頃と同じように満ち潮で小さくなった干潟に次々とシギやチドリが集まってくる。礫に擬態したムナグロのそばをウミンチュが帰っていく。鳥たちはいつものことなので飛び立たずに安全な距離まで歩いていく。時には1000羽以上のムナグロが目の前に集まる。手の届きそうなところには、トウネンやシロチドリ、ムナグロの中にメダイチドリやオオメダイチドリが混ざり、水際にはダイシャクシギやダイゼンが陣取る。鳴き交わす鳥たち、たくさんの羽音が頭上をかすめる。「残っていた。こんな海が」。自然を感じながら鳥たちと心地よい時が流れる。

ここを「ワッターの海(私たちの海)」と誇れる泡瀬の人々が羨ましかった。

変わりゆく干潟

寂しいのは隣町にある悪がきどもの干潟はすでに乾いた土で埋め尽くされ、ユンボやトラックが群れるあの光景に成り代わっていることだ。そして今泡瀬干潟の埋立工事は着々と進んでいる。ホットスポットと呼ばれる貴重種がたくさん見つかった沖合いの深場の周りでは海上工事が行われ護岸が建設されている。陸からは鉄の道が走り、鳥の集まる干潟を分断した。異変に気づいたのはこの春からである。水は濁り砂は思いもよらない所へ動き出した。両手をあげて空を仰いだ海草場は砂に埋もれ黄色くしなび、そして枯れていった。海草を失った味気ない地表に突き刺さるハボウキガイも訪れるごとに消えていく。沖合いの護岸はまだ小さく、これから行われる巨大な埋め立てを思うと悲しくてたまらない。

死に急ぐ干潟を救うには
どうすればいいのだ。
涙は流したくない。
もはや争っている場合でもない。
早く気づいて、もう時間がない。
泡瀬の海を愛しここで
生きてきた人たちと
海へ入らねば。
この街の人々の夢を聞かずに
歩む事はできるのだろうか。

山城正邦

市民による海岸植物群落調査の意義

開発法子（財）日本自然保護協会保護・研究部部長（研究担当）

日本自然保護協会（NACS-J）では、海岸植物群落の保護に取り組むため、2004年から3年間にわたり、全国の砂浜海岸を対象に、市民による海岸植物群落調査を実施してきました（写真1）。調査では、海岸に生育する植物群落だけでなく、砂浜のようすや人工構築物、人びとの利用状況など海岸の環境についても調べました。これまで調査には1000人を超える人たちが参加し、約1000カ所の海岸の調査結果が集まりました。

現在、結果の集計と解析を行っているところですが、今回は調査の中間結果から見えてきた日本の海岸の現況を報告します。

海岸の植物群落が危ない！

海岸には、ハマヒルガオなど海岸にしか生育できない植物が生育し、日本のふるさとの海辺の景観を形づくっています。これら海岸植物は、潮風に含まれる塩分や、風による砂の吹きつけ、埋もれなどの影響を受ける変化の激しい過酷な環境に適応して生育しています。

しかし、海岸の人工化が進むとこのような海岸特有の自然環境が失われてしまいます。内陸のような穏やかな環境になると本来なら海岸には生育できない植物が入りこんできます。すると、海岸植物は競争に負けて、生育地が狭めら

れ減少してしまいます。さらに埋め立てなどの人工化が進むと、砂浜や塩生湿地など生育地そのものが消滅し、海岸植物群落はもとより、海岸独自の生態系も失われます。第5回自然環境保全基礎調査では、自然海岸は全国の海岸線の約53%、島嶼域を除く本土域では約42%まで減少していると報告されました（環境省 1998）。

1996年にNACS-JとWWFジャパンが発行した「植物群落レッドデータ・ブック」の解析結果からは、海浜草本群落、塩生湿地群落、マングローブ林、河川礫原草本群落、貧栄養湿原、河畔林など河川や湿地、海岸等水辺の植物群落が危機に直面している実態が明らかになりました。

中でも植物群落を含む海岸の自然については、国の施策において河川などに比べ保護の取り組みが大きく遅れています。その主な原因の一つとして、我が国の海岸管理における縦割り行政の弊害があげられます。

行政上、日本の海岸は、海岸保全区域、河川区域（河口）、港湾区域、漁港区域、保安林、農地（干拓地）に区分され、国の所管はそれぞれ、国土交通省河川局海岸室、河川局、国土交通省港湾局、水産庁、林野庁、農林水産省農村振興局と分かれています。海岸の管理についても、海岸法や港湾法など、規定している法律が別になっています。そのため、国レベルで海岸全体の自然環境を調査し、モニタリングする体制ができておらず、海岸の自然環境に関する全国的なデータの蓄積はほとんどありません。危機的な海岸植物群落の保護に取り組むためには、保全策の検討に資する全国の海岸のデータが必要でした。

このような状況から、市民による海岸植物群落調査を立ち上げました。短期間で全国の状況を把握するには、日ごろから自然観察に親しんでいる人たちのネットワークを活かした市民による調査が有効と考えました。



写真1 調査風景

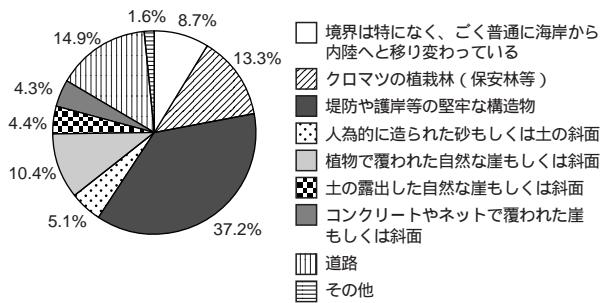


図1 海岸からの陸への連続性を分断するもの (海岸と内陸の境界)

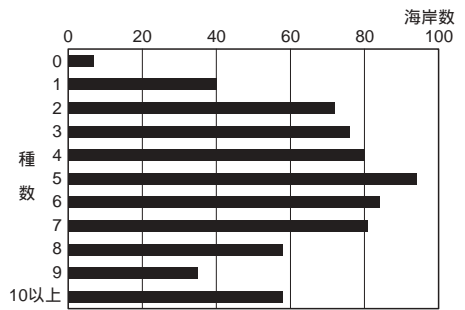


図2 生育植物種数と海岸数

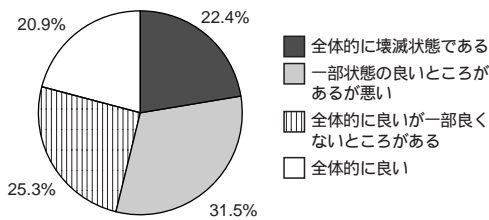


図3 群落の生育状態

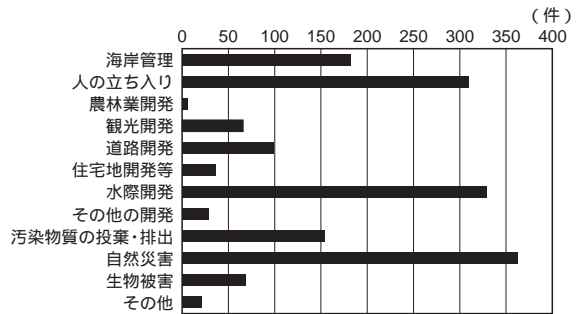


図4 群落に対するインパクト要因

調査の中間結果

2004年3月から2006年3月末までに実施された723海岸(26府県)の調査結果の一部を紹介します。

波打ち際から内陸へと連続する海岸の範囲について調べたところ、約75%の海岸が、堤防や護岸などの人工構築物や道路、クロマツ植林等で分断され、海岸の奥行きが狭められていました(図1)。その分、海岸植物群落の生育地が減少しているといえます。海側にも陸側にも人工物がない自然の海岸は、1割にも満たない状況でした。「調査に行ったら護岸工事で砂浜が無くなっていた」といった報告も届きました。

生育している海岸植物の種数については、半数以上の海岸で5種以下となっており、10種以上の生育が確認された海岸は、全体の8%でした(図2)。奥行きのある自然状態のよい海岸では概ね20種以上の海岸植物が見られます。

植物群落の生育状態については「壊滅状態」とされた海岸は22%を占め、半数以上の海岸で生育状態が「悪い」とされました(図3)。群落へのインパクト要因としては、もっとも多かつ



写真2 コマツヨイグサ

たのは護岸工事。次いで、人の踏みつけ、台風、ゴミ・廃棄物等の投棄でした(図4:インパクトを分類しまとめた結果)。

さらに、200カ所を超える海岸で、北米原産のコマツヨイグサ(写真2)の生育が確認されました。ほかにもキミガヨランやオオフトバムグラ、アメリカネシカズラなどの外来種が各地の海岸に入り込んでいることが報告されました。

外来種オオハマガヤの問題

外来種の中で、在来の海岸植物にとってもっとも大きな脅威となっているのがオオハマガヤ

の植栽です。私たちの調査で、東北地方を中心に外来種のオオハマガヤ *Ammophila breviligulata* が広大な草原を形成していることが明らかになりました（写真3）。特に大規模なオオハマガヤの植栽が、青森県、秋田県、山形県、石川県で確認されました。これらの海岸では、治山事業として、クロマツの保安林を飛砂の害から守るために、その海側に草本類を植栽していますが、そこに外来種のオオハマガヤが用いられていたのです。

オオハマガヤが一面に植栽されてしまうと、在来の海岸植物は生育する場を奪われ、本来の日本の海浜植生が破壊されてしまいます。そこでNACS-Jでは、事業者に対しオオハマガヤの導入の中止と、導入に至る実態調査、既に植栽されたものの除去と従来海浜植生への回復を実施するよう要請しました。

事業者からは実態調査とこれ以上の導入の中止、植栽地から拡散したものの除去を行うとの回答がありました。事業者に確認したところ、オオハマガヤが導入された経緯は、本来は在来種のハマニンニクを植栽に用いるところを、外観が類似しているオオハマガヤを区別せずに誤って植栽してしまっていたことが明らかになりました。一方、自然の植生への回復については困難との意向が示されたため、自然植生回復に向けて継続して協議することとしました。

海岸植物群落の保全にむけて

調査結果が示すように、海岸の植物群落は、人工構築物やクロマツ植林による砂浜の分断、外来種の侵入によって、生育場所が失われつつある実態が確認されました。海岸植物群落の保護を進めるには、汀線 - 砂浜 - 後背地の海岸環境の連続性を確保する形で保全することが重要です。それは植物群落そのものだけでなく、砂浜に営巣するコアジサシや、産卵に訪れるアカウミガメなど野生動物の生息地を保護することでもあります。海岸の景観や人が海の自然と触れ合う場をも守ることで。

またさらに、各地で海岸の侵食が見られ、海岸植物群落生育地の減少に拍車をかけています。侵食の原因としては、河川の上流部でのダム建設や河口部での堰建設などによる陸から海への



写真3 オオハマガヤの植栽

土砂の供給の減少、消波堤による海食崖の侵食の低減、海岸での人工物構築による潮流の変化などが考えられています。このようなことから、海岸植物群落の保護を考えることは、その生育地である海岸環境を考えること、そして海に流れ込む河川の管理や海岸管理のあり方考えることに深く結びついているといえます。

1999年海岸法の一部が改正され、防護だけでなく、環境や利用とも調和のとれた総合的な海岸管理をすることが目的として位置づけられました。海岸ごとに策定される海岸保全基本計画（防護、環境、利用の基本的事項）では、地域住民の参加が位置づけられており、海岸の保全に対してだれでも意見を出すことができます。

市民参加調査は、多くの人々が調査に関わることで、地域レベルできめ細かく海岸植物群落の状況を把握することができるのはもちろんですが、少しでも多くの人々が関心をもって海岸の自然を見守っていくことに大きな意義があります。これは、人の立ち入りやゴミの投棄など海岸植物群落への直接的なインパクトを低減させることや、海岸保全に係る市民の意見を海岸管理に反映させていくことにつながります。

NACS-Jでは、本調査の解析結果をもとに、海岸植物群落保護の視点から海岸管理のあり方を見直し、これまでの海岸管理において十分考慮されてこなかった海岸の自然環境保全のための提案を行っていきたいと考えています。

- ・調査結果は、NACS-Jのホームページで公開しています。 <http://www.nacsj.or.jp>
- ・ホームページでは、調査員が撮影した現地の写真や海岸の紹介文を掲載。県ごとの植物種リストや、主な植物群落の分布、アカウミガメ・コアジサシなどの生育分布も地図表示されています。

伊勢湾「木曾岬干拓地」環境復元の取り組み

木原寿代 自然観察指導員三重連絡会事務局長、松名瀬干潟ウォッチング代表

三重県桑名市長島町にある施設「輪中の郷」に展示の約300年前の「古図」を見ると、当時は木曾三川（揖斐川・長良川・木曾川）の原型にあたる河川が網脈状に流下していて、河口域は広大なデルタ地帯であった様子がうかがえます。



伊勢湾奥域の開拓の歴史は古く、1600年代には開始されていたといえます。度重なる洪水で1900年代初頭、明治政府は治水事業の一環として、オランダからデ・レーケなどの技師を招き、明治改修と呼ばれる大規模な河川改修に着手しました。その時に流路は現在の揖斐川、長良川、木曾川の三川に分流されました。

悪名高き「長良川河口堰」は10年経過した今も、国は過去の過ちを認めようとしていません。その「長良川河口堰」のお隣り「木曾川」の左岸、三重県と愛知県の県境に、これまた国の失策の干拓地があります。その名は「木曾岬干拓地」。

愛知県の「鍋田干拓地」に隣接した面積443.4haの干拓地です。木曾岬干拓地は鍋田干拓地事業に続いて1966年（昭和41年）に国（農林水産

省）によって着手されました。当初の事業目的は、都市近郊農業地帯としての立地条件を生かし、後背地農家の経営規模を拡大し、農業の近代化および経営の安定化をはかることでした。しかしその後社会情勢が変わり、この目的の実現が出来なくなり放置されたのです。

言うまでもなく、干拓地の過去は広大な浅海、干潟であり、伊勢湾の生物生産力と水質浄化に大きく寄与していました。干拓による機能消失は、伊勢湾の漁業衰退と環境の悪化をもたらしました。当時、木曾川河口一帯はハマグリやノリの主産地でしたが、国策ということで地元漁業者は断腸の思いで漁場を手放しました。干拓計画時に三重県が地元漁協や浅瀬の土地所有者に、干拓後の農地を有償で優先配分するとの協定を結んでいました。しかし、土地が農業目的でなくなり、この協定が実行できないことで補償問題がこじれた経緯があります。

以来40年、この干拓地は手付かずのまま経過しました。1997年（平成9年）に三重県と愛知県は共同で「木曾岬干拓地土地利用検討委員会」を設置し木曾岬干拓地の利用について検討した結果、2000年（平成12年）に79.6haを愛知県が、335.2haを三重県が購入しました。4.2haは第二名神用地として道路公団に、河川堤防関係の24.4haは国土交通省のものとなっています。

2005年（平成17年）1月、三重県は当面の土



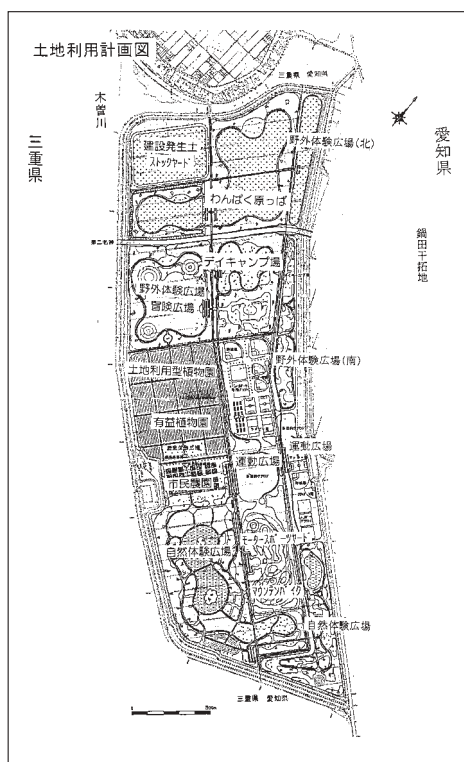
木曾岬干拓地
（2006年1月）撮影：伊藤恵子



木曾岬県道バイパス工事



伊勢湾岸自動車道盛り土現場



三重県・愛知県の土地利用計画



干潟復元のイメージ案



取り戻したい風景

地利用として、20haを建設発生土ストックヤードとして、125.1haを野外体験広場、55.2haを農業体験広場、61.7haを運動広場、59.9haを自然体験広場、13.2haを道路、水路として整備することになりました。将来的には盛土等を前提とした、高度な形での都市的な土地利用に発展させていくという段階的な利用計画です。

2月には、この事業の実施にあたり「木曽岬干拓地環境影響評価準備書説明会」がありましたので参加しました。日本野鳥の会三重県支部からは、全国有数のチュウヒ繁殖地としての保護が訴えられました。木曽岬町民からは『S41年には206あったノリ養殖業者が8になった。増産ということで犠牲を払って耐えてきた。県は「地元と手をたずさえて取り組む」と言いながら地元にも相談もない。漁業者全員の好意を踏みにじるものだ』などと厳しい意見が続出しました。

3月には「木曽岬干拓地整備事業環境評価準備書」の意見公募に対して、自然観察指導員三重連絡会からは、「三重県側での説明会は、事業についての理解が得られているとは思われない

状況です。このまま事業を推し進めるのではなく事業計画自体について、場合によっては干潟に戻すことも含め、地元住民だけにとどまらず、漁業関係者や自然環境に関心のある者、伊勢湾全体の状況改善に取りくむ者など、多くの人で十分な話し合いを行うべきであり、そのような議論の場が設けられることを要望します。」と意見書を提出しました。

10月には「木曽岬干拓地整備事業に係る環境影響評価に関する聴取会」に「伊勢・三河湾流域ネットワーク」の4名の皆さんと共に「干潟や浅海の復元」を求めて意見を述べました。しかし意見書はあくまでも参考とするだけにとどまり、2006年（平成18年）6月、三重県は伊勢湾岸自動車道よりも北側部分から、海拔マイナス50cmの現状の土地に対して、高さ5mの盛土工事を始めました。

「自然再生推進法」が出来て、干拓地を干潟や浅海に戻す事業も行われる時代です。木曽岬干拓地は、伊勢湾の環境復元の第一歩として、残された部分について粘り強く見守っていく必要があります。

諫早の十年、セマングムの十年

辻 淳夫 日本湿地ネットワーク代表

「七回忌」を伝える「イサハヤ干潟通信」でも、山下弘文さんの発言（過去の発言の再録）は、元気で色あせずにいた。逆にいえば、彼が期待していた水門開放から干潟回復への進展を、まだ得られないのはなぜと自問せざるをえないことだった。また韓国では、諫早をモデルに始まった筈のセマングムが、諫早の10年、有明大異変に学ぶこともなく、より悲惨な体験を、諫早の10倍の規模で実証することを始めてしまったのだ。

3月16日、大韓民国最高裁で敗訴した弁護団の声明は、痛切だが希望は失っていない。干潟生態系の皆殺しがどんな結果を招くか、その悲劇を経験して気づくだろう、どうしても、海と川を開放してひとつにしなければならぬと。「ギロチン」の映像を見て、「勝利を確信した」といった山下さんに通じる心情だ。ただ、4月には締め切られた時の行動が伝わってこない。裁判の結果が、その後の人々の意識行動をしばってはいないだろうか？

山下さんは豪放直截な言動で有明海4県の漁民をひとつにして闘ってきた。しかし、それは人好きで、繊細なやさしさがあつたからだ。何より、人と会い、語り合い、対立する相手とも通じ合えるものを持ったぶつかり合い、直接行



1998年4月、「諫早湾痛恨の碑」の建立式での山下ご夫妻



干潟の生物調査を行う山下さん



1999年5月、コスタリカでのラムサール会議にて。
左から、私、山下弘文さん、伊藤よしのさん

動が身上だった。その彼が、「裁判の原告とは会えません」と、面会、同席を拒絶されたのが一番応えたと、忠告してくれた。山下さんではない私には、共感を広げ、世論に訴え、実証を重ねることしかなかったが。

「やるべきことをからだ一杯抱えて逝ってしまった」と、彼の遺志を継ぎ、その言葉を風化させないとがんばっている八千代夫人は、彼の書いたものを読むたびに彼の大きさを知り、あらたな元気をもらおうという。高知の学生時代に喫茶店で働いていた八千代さんを見染め、卒業と同時に恩師を伴ってプロポーズした弘文さんは、純真な子どもと同じで、母親役もしてきた。いつも二人で運動や社会のことを話し合っていたので「カアチャン」の貢献を話したがったが、

夫人は固く禁じてきたそうだ。ゴールドマン賞を受けて、喜びを分かち合う相手はときかれ、初めて「my wife」と言えたと、喜んでいたという。

諫早にゴカイなど300種以上の生物がいることを調べ、大部分が韓国と共通することを知って、韓日の合同干潟調査団をはじめた山下さんは、出会った人々に「韓国は日本のお兄さん」といつも謙虚な姿勢をくずさなかった。初めての韓国調査のとき記者会見して「セマングム」の

保全を訴えたとき、新聞報道を見た韓国の学者から「日本人が何を！」という感じの反発を受けられた。当時共同代表だった私にも知っておいてほしいと、その方からの手紙と、誤解を解くために丁寧に書かれた返事の写しが送られて来た。

兄と慕った韓国の壮大な干潟が、諫早をモデルにされながら、その結果を見ないで同じ轍を

踏んでいくのはどんなに痛恨の思いだろう。でも、「大丈夫！水門は絶対に開けんばいかん時がくる」と、豪放な高笑いをされているかもしれない。

排出せざるをえない腐水を「かくはん礁」でごまかそうとする農水省に、「ムツゴロッド」構想など、前向きな代替案をぶつける実力行動を待っているのかも。

山下弘文さんの思い出

日本の干潟の先住民 山下弘文さま

多くの人たちと同じように、山下弘文さんにお会いする前に彼の本を読みました。私の場合は、「だれが干潟を守ったか・有明海に生きる漁民と生物」(人間選書、1989年7月出版)でした。

そのころの私は日本の湿地問題に取り組んだ際、ラムサール条約を知り、日本各地の湿地の情報を探していました。この本などを参考にして英語のレポートを作って1990年のモントルーCOPへ行きました。

そのころ、諫早で干潟の自然を守る運動をしていたのは山下弘文さん、八千代さん、写真家の富永健司さん(写真1)とカメラマンの岩永勝敏さんとあと何人かの人たちくらいでした。あまりにも市民運動がなかったことに驚きました。

それから1991年の「国際干潟シンポジウム」で日本湿地ネットワーク(JAWAN)が設立されたときのことを思い出します(写真2)。山下さんは小さいながら自分が代表として活動でき



写真1 富永健司さん(左)と山下弘文さん(右)

鈴木マギー 日本湿地ネットワーク運営委員



写真2 1991年の国際干潟シンポジウムでの山下弘文さん

る団体を持てたことをとても喜んでいただようでした。

そのころ私は「地球の友」の会員でした。地球の友はその前に「熱帯林行動ネットワーク(JATAN)」の設立に力を入れていたので、「日本湿地ネットワーク(JAWAN)」の結成にも支援しました。東京から仲間も参加しに来ました。しかし、残念ながらそのすぐ後に、地球の友のリーダーたちから突然、「この運動はやめます。解散しますか？」という話が出され、地球の友自身を存続させるのがぎりぎりのところでした。JAWANがJATANのように地球の友からの支援、特に山下さんの人件費をもらう可能性がなくなりました。

全国から集まるのがかなり大変で、運営委員会はみんなが集まることができるイベントのときを利用して開きました。そのためなかなか思うように時間がとれず食事をしながらの会議が



写真3 高知県の大手の浜で。左から、山下さん、私、一番右が前田些代子さん

ふつうでした。山下さんが「せめて生活のため月15万円はないと運動は続けられません」との叫び声を毎度聞きました。なにもできなかったことは申し訳なかったといつも思います。

JAWANができてからすぐ、山下さんの大学生のころの故郷、高知県のサンゴが生息している海で、必要のない巨大なマリーナ建設を反対している前田些代子さんの呼びかけに応えて、山下さんは九州から、私は香川県から大手の浜へ行きました。山下さんと一緒に海で泳いで、きれいなサンゴ（サンゴ礁でなく、単独で成長するサンゴ）を見ました（写真3）。

山下さんは最初から干潟だけでなく、危ない湿地と市民運動でさえあればJAWANは味方になるべきだ、という見方をする方でした。特にお酒がおいしい地域ならなおさらね。ハッハハ。

ところで1993年の釧路会議で、日本湿地ネットワークの有名な活動は辻淳夫さんが日本の干潟についての緊急保全アピールをしたことだと思いますが、そのときのJAWANのサイド・イベントは山下さんのアイデアで「先住民と湿地保護」だったことは今ほぼ忘れられているのではないのでしょうか。現地アイヌの方々とオーストラリアから来た先住民の方が本会議場の前で、大きい竹のようなオーストラリアのディジュリドゥで自発的なコンサート・儀式を行ったこともありました。諫早の漁民を愛していた山下さんは世界の先住民たちについても心の底から大切にしていました。

1998年のゴールドマン賞のワシントンでの授賞式はナショナル・ジオグラフィック協会本部

で行いました。そのとき、山下さんのスピーチの通訳をさせていただきました（写真4）。私は小さいころからナショナル・ジオグラフィックが大好きで、本当に夢のような瞬間でした。国際干潟シンポ1991の海外ゲストのサージ・デディナ氏のご協力で、岩永さんの名作品「干潟のある海・諫早湾1988」の一部がナショナル・ジオグラフィックのテレビ番組（アメリカ）で放映されたこともすごく嬉しかったです。

南アメリカからゴールドマン賞を受賞したコロンビアの先住民の方も、命賭けで土地を乱開発から守る運動をしていました。受賞者の中でお酒を飲むのはこの方と山下さんのみでしたので、いつも一緒に食事をしていました。

スペインのラムサール会議のときに私は南アメリカから来た先住民の方に声をかけました。「ラムサール条約について、どう思いますか？」すると、おいしくない食べ物が口に入ったような顔をして「言葉ばかし」と答えました。

山下さんは亡くなる直前まで諫早の干潟の再生に燃えていましたが、韓国の干潟についても真剣に取り組んでいました。諫早干潟より10倍以上大きいセマングム干潟についてかなり気になっていたと思います。

そして、次回のラムサールCOP10は、命賭けの運動を無視してセマングムを破壊している韓国で開催されます。山下さんが生きていたなら、今、何を言うでしょうか。残念ながら、私は想像できません。一般の人が想像できない考えをいつも自発的に出してくれた山下さんが、本当に今も生きていてくれたらいいね！と想います。



写真4 ゴールドマン賞授賞式での山下さんと私

COP10に向けた 韓日交換プログラム(於：釧路～知床)報告

柏木 実 / 伊藤よしの 日本湿地ネットワーク副代表

韓国環境運動連合 (KFEM) と日本湿地ネットワーク (JAWAN) は、11月6日～11日の6日間、ラムサール条約第10回締約国会議 (COP10) に向けた韓日交換プログラムを釧路市などで開催しました。

これは、1993年に釧路で開催されたCOP5の経験に学び、2008年韓国でのCOP10を成功させようという目的で実施されたもので、KFEM湿地委員会副代表のイ・ピョンジュさんや湿地海洋チーム代表のキム・キョンウォンさんなど、COP10を担う韓国各地からのNGOメンバー20名とJAWANのメンバーなどが参加しました。

7日にはトラストサルン釧路の杉沢拓男さんのガイドで、釧路湿原の歴史や、条約湿地となつてからも発生し続けるさまざまな問題、その解決に向けた再生の取り組みなどを詳しく聞きました。

8日のワークショップでは、COP5開催当時の経過について地方自治体、NGO、ラムサール事務局などの立場からの報告があり、また韓国の最近の動きに関しては、締約国会議開催前の2日間 (2008年10月26・27日) のNGO会議開催が決まったことなどが報告されました。

8日夜にはCOP10 NGO会議に向けて実際的な準備をはじめのための会議が持たれ、これからのスケジュールや活動方法について検討し、韓

釧路湿原温根内木道からヤチマナコの深さを測る



日のみならずアジアのNGO、国際NGOが参加する国際的なネットワークの構築など、NGO会議の成功を目指して協働していくことを約束しました。

9日には同じく杉沢さんの案内で、新しい条約湿地である野付半島と、知床半島を視察しました。夜には毎晩のように会議も開催されましたが、参加者全員が精力的にスケジュールをこなし、条約湿地3カ所、世界自然遺産1カ所を回ることができました。

参加者の一人、ソニョンさんは、「釧路湿原を視察する機会が得られたことを嬉しく思います。このプログラムを通して参加者が同じ体験をしたことで、理解と協力関係がさらに進み、協働ができるようになりました。またKFEMとJAWANがCOP10の準備のための詳しいプランを立て、2008年に向けてははっきりと図を描くことができました」と感想を語っています。

この交換プログラムを通じて韓国NGOと日本湿地ネットワークは、COP10に向けて力強い一歩を踏み出したと言えます。



新庄さんより1993年COP5 釧路市の取り組みを中心に説明を受ける



羅白漁港にて

私の夢の舞台「湿地と鳥たちの友だち」

チョ・ミンギョン（趙民慶）湿地と鳥たちの友だち会員

私は、気の向くまま、足に任せて歩くのが好きだ。途中、分かれ道に立った時、こっちへ行こうかな、それともあっちというような悩みも一瞬。私は気の向くままに歩き始める。

釜山の環境団体「湿地と鳥たちの友だち」の扉を叩いたのはこのような自分の性格のおかげと思う。扉の向こうには、広大な湿地と多種多様な鳥たちを暖かく抱いている洛東江河口があった。さらに驚いたのは、母のふところのように暖かくゆったりした洛東江河口を毎日訪れる「湿地と鳥たちの友だち」の会員たちの情熱であった。

当時、私は、湿地や鳥どころか環境にはちっとも興味がなかった。そんな私が軽い気持ちで2005年5月「湿地と鳥たちの友だち」の扉を叩き、洛東江河口に出会ったわけだが、今思えばとても尊い縁である。洛東江河口にめぐり合ったおかげで、つま先から感じられる柔らかくしっとりした干潟に触れる幸せを知ることができた。また、コハクチョウとオオハクチョウの違いを知るためには、図鑑の中の知識ではなく、彼らのところを訪れて彼らと目を合わせて彼らの声に耳を澄ますことであることが分った。

最初は溢れそうな気持ちを言葉にしただけで何処かに消えていってしまうのではないかという不安があったが、洛東江河口で感じたことを、今

は少しずつ伝えられるような気がする。索漠たる私の心に自然というきれいな種をまいてくれた「湿地と鳥たちの友だち」はこれからもずっと一緒である。

みなさん、きれいな種がどのように育っているか知りたくありませんか？いまから「湿地と鳥たちの友だち」で伸び伸び育っている「たね」の話をお聞かせしましょう。

たね1. 「湿地と鳥たちの友だち」の扉をたたきかけ

近年、干潟や渡り鳥の観察、探鳥会に参加する人口は増えているが、それに応える専門の案内役は足りないのが現実である。「湿地と鳥類生態案内者養成課程」は、2002年度から専門の案内役の養成を目的に釜山教育大学で始まった。研修期間は毎年5、6月から11、12月までおよそ7カ月であり、毎週第3金・日曜日に理論講義と現場実習が行われる。

金曜午後7時からおよそ3時間、湿地と渡り鳥観察会に必要な基礎知識の習得を目標に、探鳥・塩生植物・ベントス・生態体験プログラムなどのテーマで理論講義がある。初日はチーム名や旗を作る。白い旗にチーム名を書き色とりどりの絵を描くうち、いつの間にかひとつになっていくのを感じる。日曜の午前中は洛東江河口



写真1 去年の「湿地と鳥類生態案内者養成課程」。チーム別に旗を紹介している



写真2 鳥類観察。どんな鳥が見えたのかしら？



写真3 冬を教えてくれた渡り鳥、雁

ウルスットのムル（水）文化館でスライドを見た後、お弁当を食べる。午後には本格的な現場実習が始まる。チヌド・ミョンジ干潟・シノリ干潟・ウルスット南端・チュナム貯水池・ウボ沼など洛東江河口や周辺の干潟に出かけて理論講義の内容を実習する。

去年、私は現場実習のため月に1回洛東江河口を訪れたが、回数を重ねるにつれ季節の変化を身体中に感じる事ができた。それは洛東江河口からの贈り物ではないだろうか。カレンダーを見て季節の流れを認識していた私が、体で季節の変化を感じ取ることができたのは、雁のおかげである。

はじめて洛東江河口を訪れた時は雁だけしか見えなかった。2度目は田んぼでえさを食べる雁が見えた。3度目は、雁を観察する間中、冷たい風にさらされて頬が凍りつくような思いだった。体で冬を感じさせてくれた雁。秋が終わるころ、冷たい風が吹き始めると、心の底から懐かしい思いが溢れ雁の飛来が待ち遠しくなる。雁との出会いのきっかけとなった「湿地と鳥類生態案内者養成課程」で養成された案内者たちが、洛東江河口を守りその重要性を広く知らせる役割を存分に果たしてほしい。

たね2．こんなに鳥がたくさん！

「洛東江河口定期鳥類調査」

毎月1、2回、6調査チームが洛東江河口一帯を6区域に分け渡来する鳥類の種と個体数を調べる。私は、去年9月から「湿地と鳥たちの友だち」の運営委員のパク・チュンロクさんと一緒に船に乗りトヨトゥン・ペカトゥン・シン



写真4 2005年12月の定期鳥類調査。洛東江河口のトヨトゥンにて



写真5 2006年1月21日の全国冬鳥一斉センサス。ヘラサギの飛行

ザド・チャンザド（訳注：どれも、洛東江河口部にある洲の名前）などに渡来する鳥類を記録している。年に1回調査報告書を出す、中には調査結果とともに思い出がぎっしり詰まっている。干潮時間が早い時、とくに冬は暖かい布団の中でもっと寝たい誘惑と戦わねばならなかったし、厳しい冬の風に疲れ病気になるような時もあった。それでも調査に参加し続けているのは、磁石のように私を引きつける洛東江河口の風景やそこに渡来する多種多様な鳥たちである。

はじめてフィールドスコープを覗いた時、鳥のもの凄い数に驚き目を擦ってもう一度確かめたことがある。肉眼では何も見えないのにフィールドスコープの中には数百羽のシギが波と遊んでいるみたいによちよち歩きながら餌を食べているのだ。彼らはずっと前から洛東江河口を訪れているはずなのに、私は今まで彼らの存在に気が付かなかったことに申し訳ない気持ちでいっぱいであった。こぶしのような小さいシギたちが地球の南半球と北半球を行き来することを知り、弱気な自分を反省したこともある。寂しげらないよう声をかけてくれる友達のような鳥たち、ふわふわした布団みたいな葦原に横たわり味わう昼寝の気持ち良さ、日常のストレスが一気に吹っ飛んでしまいそうな広々とした風景、潮風の吹く船上で食べるお弁当、自然のように心豊かな調査メンバーたち。それらすべてが私を洛東江河口に引き寄せているようだ。去年の冬にミョンジ干潟で数百のハクチョウを数えたが、ハクチョウと目が合ったことは一度もない。ハクチョウと目が合うと一年中幸せに暮らすことができるそうだけれど……。今年10月16日、10羽のハクチョウがはじめて洛東江河口のミョングンモリトゥンに来たという。今年の冬はハクチョウと目を合わせるため手まめに洛東



写真6 2006年7月の定期鳥類調査。
足環をつけているミュビシギ



写真7 週に1回生態日本語勉強部屋の
の会がある。「湿地と鳥たち
の友だち」の事務室にて



写真8 7月洛東江河口を訪れた柏木実
さんと伊藤よしのさんととも
に。「湿地と鳥たちの友だち」
の事務室にて

江河口を訪れるつもりだ。こんな自分を見てどこかでハクチョウが笑っているような気がする。

たね3. 私が日本語を習う理由 「生態日本語勉強部屋の会」

環境団体の会員という責任感のせいで、環境を考え環境のためにやるのが楽しくない時がある。仕事も何事も、義務感や責任感からよりは楽しみながらやるともっと自発的で実践力を持つと思っている。「湿地と鳥たちの友だち」の会員の間で、少人数の集いを作り環境や生態の勉強をしようという動きがあった。それはさらに日本の本を使い生態だけではなく日本語の勉強もやろうという意見が出た。英語でも中国語でもなく日本語を習おうと思った理由は、自然環境が似ており活発に交流できるお隣さんだからではないだろうか。様々な問題を抱えている韓国に比べたら、日本の環境教育は非常に体系的で地域的に特徴があって良いと思う。日本の環境教育や湿地保護運動、湿地センター運営や教育プログラムの開発などを調べ、それをもとに韓国においてためになる情報や資料を求めるとの必要性を認識したのだ。そのためには日本語の勉強が何より先であろう。そんな訳で1月から週に1回、「生態日本語勉強部屋の会」がスタートし、先週37回目を迎えた。塾で習う難しい日本語ではなく、日本語を通して湿地や鳥について勉強する楽しさは言葉では表現できないくらいである。参加者の語学力のレベルが違っても関わらず同じ内容での勉強ができる理由は、全員同じ興味を持っている湿地と鳥に関する内容だからなのだ。中には読むのが得意な人、漢字が得意な人、湿地や鳥を得意とする人などい

ろんな人がいるため、いくら難しい言葉でも全体的な内容の理解には問題ない。自ら進んで、はっきりとした目的から習う外国語の勉強は実力だけではなく自信を持たせてくれるし、すごく楽しい。

今年7月、日本湿地ネットワークの柏木実さんと伊藤よしのさんが洛東江河口を訪れた時だった。迷わず付き合おうと思ったのは生態日本語勉強部屋の会から得られた自信・勇気のおかげである。まだまだ足りない日本語だけれど、1日中付き添い彼らとお話できてとても楽しかった。でももっと詳しく洛東江河口のことを説明したかったが、これができなくて残念に思っている。この思いは日本語勉強に拍車をかける源となっている。次のときはべらべら日本語で洛東江河口を訪れる日本の人々に洛東江河口の大切さを伝えたいと思う。さらに、2008年韓国で開かれるラムサール条約締約国会議の日本語通訳ボランティアへ向けて頑張りたい。これは自分の夢であるが、生態日本語勉強部屋の会の希望でもある。希望を持って勉強できる場所、こころざしを同じくする人びとがそばにあるということは素晴らしいと思う。

「湿地と鳥たちの友だち」では他にも数多いたねが育ちつつある。たとえば、洛東江河口保全運動・認識増進運動・調査および研究活動などなど。それら様々な活動にはみんなの夢と希望も溶け込んでいる。自分の夢を叶えてくれる「湿地と鳥たちの友だち」があり続けるかぎり、今日も私は楽しく舞台に立つことができるのだ。

(翻訳: チョン・ウンジュ)

「三番瀬再生事業」は従来型公共事業へ逆流も 「市川海岸塩浜地区護岸改修事業」に関連して

今関一夫 三番瀬を守る署名ネットワーク幹事

三番瀬は、1960年代から千葉県が埋立事業を進めていましたが、1972年ごろから埋立反対運動が起こり、堂本知事が誕生して、2001年に埋立計画を白紙撤回しました。これで、「三番瀬は、残った。」と安堵したものでした。

その後、千葉県は、今後の三番瀬再生のあり方を検討し、「三番瀬再生事業」を進めるために、2002年に「三番瀬再生計画検討委員会」を設置し、2004年に「三番瀬再生会議」に改組して現在「三番瀬再生計画」の検討及び「三番瀬再生事業」を進めています。

千葉県は、今年になって「三番瀬再生会議」の決定（答申）前に「市川海岸塩浜地区護岸改修事業」の護岸1,700mのうち100mの工事を開始し、その他の「事業計画」を年度内にも決定しようとしています。

この間、千葉県は、「市川海岸塩浜地区護岸改修事業」の強行、人工干潟の造成試験計画、ラムサール条約登録の先延ばし、東京第2湾岸道路計画の推進、「三番瀬再生会議」委員のうち環境保護団体3委員の再任について、事前の打診なしに突然「推薦」から「公募」に変更するなど進めています。このままでは、これらの「事業」は、「再生事業」どころか従来型の公共事業へ逆流しかねないという状況にあると、市民の間で危惧が高まっています。

ここでは、「市川海岸塩浜地区護岸改修事業」について、考えてみたいと思います。

千葉県がいま進めている「市川海岸塩浜地区護岸改修事業」の問題点と今後の方向は、次のとおりです。

1. 三番瀬再生の目標（「基本計画案」）

「三番瀬再生会議」は、三番瀬の再生事業を進めるため、次のとおり「目標」を決定（答申）しています。

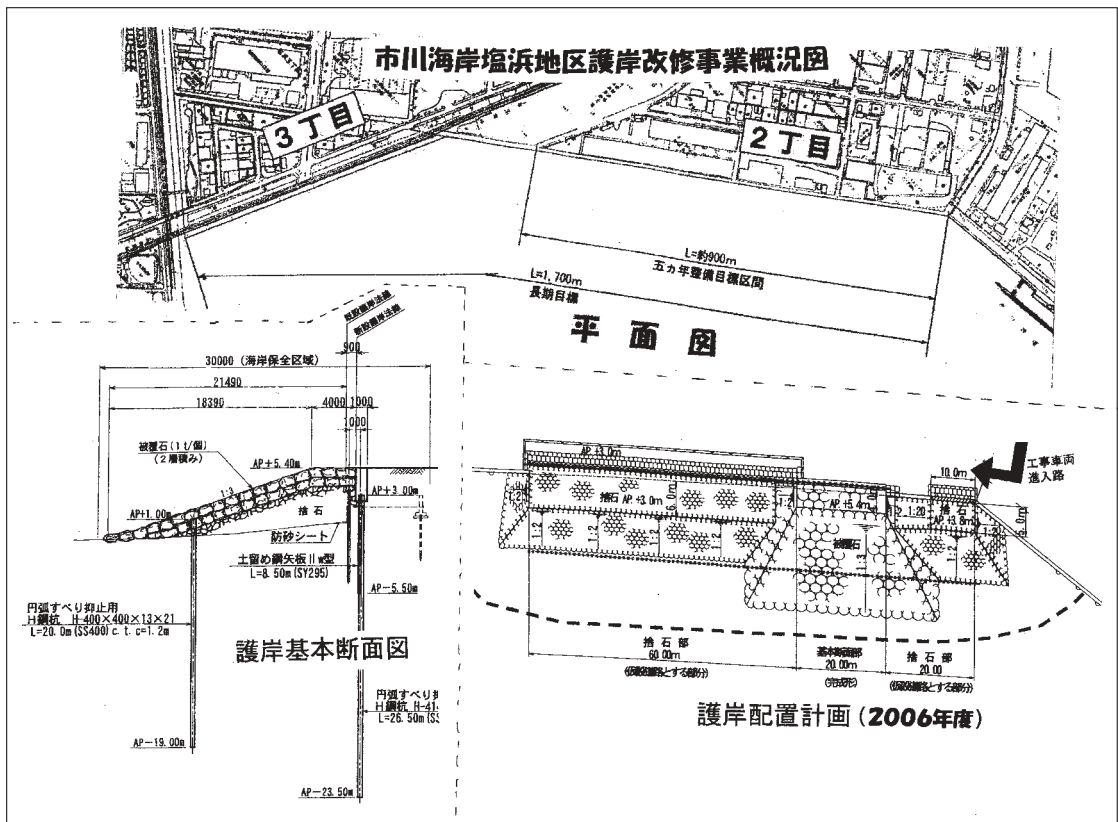
- (1) 生物多様性の回復
- (2) 環境の持続性及び回復力の確保
- (3) 海と陸との連続性の回復（「現在残っている干潟・浅海域は保全するという原則」を含む）
- (4) 漁場の生産力の回復
- (5) 人と自然とのふれあいの確保
- (6) 海域をこれ以上狭めない原則

2. 「市川海岸塩浜地区護岸改修事業」の概要

「市川海岸塩浜地区護岸改修事業」は、2002年5月ごろから「市川海岸塩浜地区護岸検討委員会」や「三番瀬再生会議」などで検討されてきましたが、千葉県は、護岸の老朽化による危険のため工事を急ぐとして「三番瀬再生会議」の決定（答申）を得ずに、2006年4月に着工しました。「市川海岸塩浜地区護岸改修事業計画」



入り口（左）と海（右）から見た市川塩浜護岸改修工事（2006年10月）撮影：伊藤恵子



の概要は、次のとおりです（上図を参照）。

市川市塩浜2丁目に所在する直立護岸の海側へ21.49m張り出し、1：3の傾斜護岸を築造する。全長1,700m、5カ年で900m、2006年度100m〔内訳「完成型」20m、仮設（捨石の埋め込み）80m〕、工期 本年4～11月、傾斜護岸完成後にその海側へ人工干潟（干出域の形成）を追加する。

3. 「市川海岸塩浜地区護岸改修事業」の問題点

「市川海岸塩浜地区護岸改修事業計画」には、前記1.の「目標」等からみて、次のような問題点があります。これらの問題点は、「市川海岸塩浜地区護岸検討委員会」「再生会議」及び市民の公募意見でも指摘されていましたが、工事を急ぐ等で十分に検討されなかったことです。

(1) 「市川海岸塩浜地区護岸改修事業」は、前記1.の「目標」のうち(3)「海と陸との連続性の回復」を実現するとして位置付けられていますが、他の「目標」について十分検討し

ていないためにそれらの「目標」には、ほとんど寄与しないものとなっています。例えば、直立護岸を傾斜護岸にするにしても、また傾斜護岸の底にマガキ群等が埋め込まれたりして、「環境の持続性の確保」等の「目標」には、ほとんど寄与していません。

(2) 護岸沿いの海域では、傾斜護岸が海側へ張り出し、さらに人工干潟の追加によりその分（ $21.49\text{m} \times 1,700\text{m} = 36,533\text{m}^2 +$ ）の海域をせばめることになり、前記1.の「目標」(6)「海域をこれ以上狭めない」に相反します。

(3) 「市川海岸塩浜地区護岸改修事業計画」には、「～生態系にも配慮した高潮防護の護岸改修を進めます。」となっていますが、直立護岸沿いに生息していたマガキ群とウネナシトマヤガイ（絶滅危惧種）等多数の生物は、護岸用捨石の埋め込みにより捨石の下で死滅させられ、護岸完成後の復元が見込まれていません。「改修工事」の実行上では、何ら生態系に配慮されていないのです。

(4) 「環境予測」では、「改修工事によって、潮

間帯の面積が増大し、マガキ礁とウネナシトマヤガイは再定着する。」とされています。直立護岸から傾斜護岸へ「潮間帯の面積が増大」しても、「再定着」はここでは未知数であり、工事前後の生物の種類・数量の変化で「環境の持続」等が明らかに復元されることが判明しない限り、「環境の持続及び回復力の確保」等の「目標」が達成されたとはいえません。

4. 順応的管理による「市川海岸塩浜地区護岸改修事業」の手直し

「再生事業」の順応的管理は、「～自然の回復力を人間がサポートするという考え方に基づいて、再生の目標に向かって少しずつ手を加え

ながら、自然がどのように変化するかを十分に観察・記録し、そのつど検討を加えながら計画を手直しする順応的管理の原則に立って三番瀬の自然再生に取り組みます。」と「三番瀬再生会議」で決定（答申）されています。

「市川海岸塩浜地区護岸改修事業」は、前記3のとおり問題点があるので、「～そのつど検討を加えながら計画を手直しする～」には、「市川海岸塩浜地区護岸改修事業」の「完成型」工事終了時を「そのつど」のひとつとして、モニタリングの結果による「評価」をおこない、次年度以降における「市川海岸塩浜地区護岸改修事業」継続の適否を調査・検討・判断することが必要であると考えます。

ラムサール条約COP10に向けた協賛金にご協力ください

2008年10月28日から11月4日の日程で、ラムサール条約第10回締約国会議（COP10）が韓国慶尚南道の昌原市で開催されます。隣国の韓国で締約国会議が開催されるということは、日本の湿地保全に関わるNGOの主張を広く世界にアピールする絶好の機会であり、そこでの取り組みがその後の日本や東アジア地域の湿地保全運動の行方を大きく左右していくと言っても過言ではないでしょう。

JAWANは2005年11月にウガンダ・カンパラで開催されたCOP9終了直後から、COP10に向けた次のような取り組みを開始しています。

環境省によるCOP9の決議日本語版作成作業にJAWAN関係者が関わり、ラムサール条約事務局が発行しているラムサールハンドブックの日本語版の製作も企画しています。今後のラムサール条約湿地登録を促進していくために「ラムサール条約湿地を増やす市民の会」を発足させ、まもなく第1次ラムサール条約湿地候補地リストを公表できる見通しです。

また、COP10において水田の湿地としての重要性に関する決議の採択を目指し、韓国、中国との関連会議に参加して準備を進めています。

COP10では本会議直前にNGOによる会議が開催される予定です。この開催に向けて、JAWANは韓国NGOから大きな協力を求められています。JAWANでは、COP10の前年に当たる2007年の秋に日本で、東アジアにおける大規模な干潟の破壊

を食い止め保全していくためのシンポジウムを開催し、干潟に関するアピールをCOP10でのNGO会議に繋げていくことを企画しています。

このような活動を展開してCOP10で大きな成果を上げていくためには、十分な経済的裏づけが必要ですが、JAWANの財政は大変厳しい状況にあります。そこで、JAWAN会員であるか否かを問わず、日本の湿地保全とJAWANの活動に共鳴していただける皆様に、今後2年間のCOP10に向けたJAWANの活動を支えていただこうと下記の協賛金のお願いをする次第です。

* * *

2006年12月から2008年11月までの2年間、協賛金、または特別協賛金のいずれかに、1人1口以上のご応募をお願いいたします。経済的に余裕のある方は、ぜひ複数口お願いいたします。

協賛金：1口 月額 1,000円
(半年分一括 6,000円)

特別協賛金：1口 月額 5,000円
(半年分一括 30,000円)

ご応募いただける方は郵便振替にてご送金ください。(半年分一括での振り込みをお願いします)

郵便振替口座：00170-8-190060

加入者名：日本湿地ネットワーク

振替用紙の通信欄に「協賛金」「特別協賛金」の別と口数をご記入ください。(今回の通信に振替用紙を同封していますのでご利用ください)

国際湿地シンポジウム in 吉野川

「国際湿地シンポジウム in 吉野川」では、吉野川河口をラムサール条約登録地とする活動を推進するにあたって、国際的に重要な湿地であることを県民と一般市民にアピールすること、そして河口の高速道路の渡河橋建設や沖洲海岸の埋め立ての中止を求め、吉野川河口域の自然環境の保全を訴えます。

第10回ラムサール条約締約国会議が開催される韓国より、朴重録(パク・チュンロク)先生を講師としてお迎えし、韓国洛東江(ナクトンガン)河口の保護運動から見た洛東江河口の干潟への思いと、河口に建設される鳴旨大橋の影響などについて講演します。

開催日：2007年2月24日(日)

開催場所：徳島市「ふれあい健康館ホール」

特別講演：朴重録(湿地と鳥の友だち委員長)

主催：日本野鳥の会徳島県支部
日本湿地ネットワーク

三番瀬「日米カキ礁シンポジウム」

日米カキ礁シンポジウムでは、米国東海岸チェサピーク湾よりカキ礁研究者とオイスターガーディナーの2名の方を招請し、カキ礁研究の最新の成果を吸収するとともに、カキ礁復元に携わる市民の方との交流を図ります。そして国内研究者と一緒に三番瀬猫実川河口域のカキ礁の価値と干潟生態系の重要性について議論を交わします。

開催日：2007年4月8日(日)

開催場所：市川市「和洋女子大学」

特別講演：マーク・ルーケンパーク教授
(ヴァージニア海洋科学研究所)

主催：日米カキ礁シンポジウム実行委員会
* * *

各シンポジウムのプログラムなど詳細についてはJAWANのホームページ(<http://www.jawan.jp/>)に追って掲載しますのでご覧ください。

干潟・湿地を守る日2007 Wetland Day in Japan 参加団体募集!!

JAWANでは、諫早湾閉め切りの日である4月14日を「干潟を守る日」とする全国的な湿地保護キャンペーンを毎年開催しています。諫早湾閉め切りから丸10年となる2007年からは、名称を「干潟・湿地を守る日」と改め、干潟だけでなく内陸湿地の保護団体にも積極的に協力を呼びかけて、キャンペーンの拡大を目指します。

ただいま、このキャンペーンに参加して2007年4月から5月にかけて観察会、学習会、写真展、シンポジウムなど、湿地保護に関連したイベントを実施していただける団体を募集中です。

参加にあたっては、キャンペーンの運営のために1口6000円の参加費の納入をお願いします。事務局では参加費を元に、全国のイベントを掲載したリーフレットを作成し、マスコミや一般への告知を行います。また、各団体にも参加費1口当たりリーフレット300枚を支給します。

参加申し込みの最終締め切りは2月8日(金)となります。下記の事務局までご連絡をいただければ、詳しい参加要項、申込書をお送りします。みなさまのご参加をお待ちしています。

JAWAN干潟・湿地を守る日事務局
〒171-0032 東京都豊島区雑司が谷3-11-4 パレドール目白205 SYスタジオ内 TEL/FAX 03-3986-6490 E-mail jawan@jawan.jp



カット：
くすだひろこ



編 集 後 記

ラムサールバスを走らせる計画をご存知ですか。市民団体が「三番瀬」をラムサール条約の登録地となるよう広く市民に訴え、登録への機運を高めるために千葉県市川市を走るバスの車体にキャンペーン広告を出そうと頑張っています。多くの市民の眼に訴えかける試みです。JAWANは来年前半、吉野川と三番瀬の2つの国際湿地シンポジウムの主催や支援をします。COP10に向けてみ

んなで知恵を出し合って重要な湿地を一カ所でも多く登録地に加えたいと思います。ぜひ応援してください。次号通信の発行は2月中旬の見込みです。(昌&恵)

韓国から来日したNGOのみなさんと同様に、私も今年の夏、北海道東部のラムサール条約湿地と知床半島を巡ってきました。その素晴らしさに、北海道東部まるごと世界遺産かラムサール条約湿地に登録してしまえばいいのに...などと思った次第です。いや、いっそのこと、北方四島やサハリンも国境を越えて一緒に。(矢)